

論文題目 『増鏡』とその時代』

氏名 斎藤 歩(さいとう あゆみ)

本論文は、中世の前半期を対象として描き出した歴史物語『増鏡』が、いかなる構想を持ってその時代を把握し、表現しようとしたのかを微細に検討し、明らかにしようとするものである。そのために論者が取った方法は、三つに分かれ、それぞれに一章を当てて論じている。

第一章では、『増鏡』の物語を構想する枠組みを捉えようとする。各巻の首尾がおおむね天皇の誕生・践祚・即位・譲位・崩御などの帝の去就に基づく「帝紀」として構成されていることと、各巻の記事構成を対比することにより、従来『増鏡』を後鳥羽院・後醍醐帝とその間の鎌倉中期の三部構成として捉えてきたが、後鳥羽院の時代・後嵯峨院時代・両統迭立期・後醍醐天皇時代の四部構成と捉えるべきであるとする。これに基づき、それらの四部がそれぞれいかなる時代認識により描出されているかを検討する。後鳥羽院は、従来理解されてきた、武家政権への憤懣を持ち、武力で立ち向かう帝王像としては描かれておらず、また近年、それに代わって提唱されるようになった、風流の帝王という理解もまた退けられる。論者は、「後鳥羽院物語」が描き出したものは、王朝的な古き「理想の帝王像」であり、貴族世界の伝統・文化への自負であったとする。「後嵯峨院時代」は「儀礼の時代」として描かれ、実体は鎌倉武家政権によって支えられる屈辱的な時代であるにもかかわらず、新たな「聖代」として描出されているとする。第三部の両統迭立期は、「老の波」の章における後嵯峨院時代の余韻を残す膨大な儀礼描写から、徐々に政治状況の混迷や血腥い事件の発生などの叙述を通して、第四部の後醍醐天皇物語の前兆が語られ、転換期として描かれているとする。第四部の後醍醐天皇の物語では、帝の強い意志と性格を簡潔な記述の中に表現し、後鳥羽院物語で示した古の理想の王朝の形態が後醍醐天皇に至って完全に喪失した状況を描き、歴史を映す「鏡」としての物語の終焉をも迎えたと説く。

第二章は、物語中に挿入されている和歌を物語叙述の位相と対照検討する。『増鏡』には祝言の歌が多く収録されるが、歴史は歌の祝福する方向へは動かず、むしろ時代は暗転して行く。これは往時の栄華を歌うことが却って喪われたことへの慨嘆を増幅するものとして機能していると述べ、第一章で探った歴史認識を支え、補完する機能を持つものとして、配置させていることを明らかにする。

第三章は、近年、膠着状態にある作者論の再検討を行っており、古い説として忘れられがちな二条良基作者説に、なお成立の可能性があることを述べる。論者は、暦応二年(1339)から貞和四年(1348)の間に、『増鏡』の成立時期を想定する。

本論文は作品の表現するところを丁寧に読解し、その主題を明らかにしようとする方法で一貫しており、歴史物語の解釈に多くの新見を加えた。著者の示した新説には更に慎重な検討が必要なものもあるが、本審査委員会はその研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)に値するとの結論に至った。